

## 視覚障害を乗り越えて 田中光夫

ぼくは卒業論文と修士論文のテーマとして風刺作家スウィフトを選んだ。その故か、このたび修士の学位を得て博士後期課程に進学するに至ったぼく自身をも、ここで風刺してしまいかねない恐れを覚える。

「ハンディキャップを克服して」などといったような優等生的な障害者とは、ぼくはまるで別世界に住んでいる。ぼくにとって視力障害は必ずしも克服さるべきものではなく、無視利用すべきものでもない。ありのままに障害を受け止めて、それを過小にも、また過大にも評価せず、ましてやその障害を意識しすぎて、本来の己の生き方を曲げるような愚は決してすまいと思っている。

さまざまな資料を集め、消化していく上で、視力障害が重くのしかかることは必定だ。江戸の末期、点字のなかった時代に活躍した盲人国学者堀保己一の、その点での不便さは、今のぼくなどの比ではない。しかし、果たして保己一の内部に、障害を克服してやるのだとの意識が決定的に強かったかどうかは疑問であ

る。むしろ、彼を支配していたのは、学問への情熱と知識への絶えざる渴望であったはずだ。ぼくもこの点だけでも保己一に迫らんとしているしただい。

「群書類従耳で読み口で書き」ではないが、修士論文を書くに当たって必要な資料は、ほとんど後輩たちに読んでもらった。それも、おこがましくも一方でぼくが彼らの英語の力の向上を助けるなどという名目の上にのった形になった。(もっとも書いたのはぼく自身だが。)そうした助けがなければ、ぼくも気ばかり焦って、より貧弱な結果を生じたに違いない。常に感謝せねばならぬと思っているし、これからもそうあるべきであろう。ただ、ぼくの感謝は、ぼくを多面にわたって助けてくれる先生がたや家族、あるいは後輩たちに、単に「ありがとう」とお題目でも唱えるように言い散らすことにおいてではなく、そうしたかたがたの助力を、ぼくがより精巧な、より価値ある形にまとめあげ、ぼくの研究の過程においてそれらを精いっぱい生かしきることに結実させたいと思うのである。

ところで、その将来の研究課題であるが、やはり十八世紀の英文学をできるだけ多面的にやっていきたいと思う。風刺作品の多様なあり方について深く調べるとともに、十八世紀のいわゆる理性時代から、浪漫的な(ある面では感傷的な)十九世紀へ移る英文学の流れを窮めてみたいのである。壮大なテーマだが、盲へびにおじずの居直り精神でやっていきたい。後期課程でそれをやるというより、これは一生の課題として規定したいところである。さしあたってはスウィフト、デフォー、ジョンソン博士などの諸作家を検討してみたい。

物ごとを研究するには心のゆとりと大らかさが必要である。障害ゆえの不便や資料の不足はいかんともしがたいが、それにおしひしがれて悲観的な、あるいは自虐他虐的な精神状態に陥ることからは、終生自分を守り通していきたい。

(大学大学院博士後期課程在学)

\*

\*

# 視覚障害を乗り越えて 永井昌彦

## 新しい世紀への課題

私が小学校三年生の途中で失明して、京都府立盲学校に入学したのは昭和十年のことでした。当時、盲学校は初等部六年、中等部四年という制度で、中等部には鍼按科（アンマ・ハリ・キウを学ぶ課程）と、音楽科（邦楽を学ぶ課程）の二つしかありませんでした。ほとんどの人と同じように鍼按科に進んだ私は、先進諸国の盲人の話を聞くにつけて、もっと幅広く勉強がしたいとねがわずにいらませんでした。

戦後の教育改革の中で、盲人も大学受験のことができることが昭和二十三年十一月に文部省から発表され、盲学校の先生のすしめもあって、受験することになりました。まず、京都大学に進学適正検査を出願し、受理されましたが、数日後行ってみると、それが取り消されていました。「責任をもって教育することができないから」というのが大学側の言いぶん

でした。

幸い、同志社大学では進学適正検査も独自に行われ、受験も許可されて、私は進学の機会を与えられました。そして、そのことが基盤となって盲学校の教師となり、盲教育研究のためアメリカに留学し、また国際盲教育者会議にも参加して、広く諸外国の視覚障害児教育について学ぶことになりました。まことに幸いであつたと思います。

「日本最初の盲啞院」として明治十一年に創立された京都府立盲学校は、去る五月二十四日に百歳の誕生日を祝いました。かつて、職業教育中心であつた学校は、幼稚園から高等部までの普通教育を保障する学校に大きく変わりました。ただ、今もって変わらないのは、生徒たちの進路が、主として伝統的なアンマ・ハリ・キウの道に限られているということです。

欧米では、視覚障害者も、工場での労働を中心に、実にさまざまな分野で働いております。教育と訓練、就職あつせん制度が整えられ、雇用の場が与えられれば、視覚障害者も、その希望と資質に従って働き、社会に貢献できることは、すでに実験済みなのです。来年から実施される養護学校の義務制によって、すべての障害児が教育を保障されることになります。百年かかってやっとここまでできたわけです。この次は、すべての障害者が、おのおのその希望と資質に従って働くことの実現です。これこそが新しい世紀への課題であると思います。

（一九七八・六・十二）

（昭和三十三年大学院文学研究科修了）  
京都府立盲学校教諭

